



教

員をしていたころは、人様のお宅にお邪魔する機会と言えば家庭訪問だった。

「勉強部屋見せてもらーけんな。」

「えーっ、やめてください。」

「じゃあ引き出しの中もね。」

などと軽口を叩いておいて訪問すると、たいいどころの家も玄関が磨き上げてあつて、客間に上がると、子ども部屋からは息を詰めて警戒をする気配が伝わってきたものだった。ぼくはさすがに経験ないが、教員になったころは、訪問最後の家で大酒を飲み、そのまま泊まって翌日は子ども家から出勤したなどという武勇伝がさしてめずらしくもなかった。時は移り、いつしか玄関先での立ち話が普通となった。ついにコロナ以降は家庭訪問そのものができなくなった。今年五類に移行して元に戻るかと思えば、そのままやめてしまった学校もあると聞く。

教師という立場への敬意と時に反感、ぼく個人に対する支持と時に不支持、客に対する個々の家庭の習い、それらが混ざり合つて対応はそれぞれ異なつてくるのだけど、どの家でも明らかに客人として遇された。主客の別が前提になつて、ぼくは自然のこととして感じていた。

学校の先生でなくなつて、有償ボランティアのおじ

さんとしてあちこちの家に手伝いに行くようになって、あつたにお客さんではない別の立場を獲得したのだ、と気づいた。それがぼくにとつては新鮮で心地よく思えるということにも。

お客ではない者に、人は意外と無防備だ。散らかつているところを見られても別に恥ずかしいとも思わない。ぞんざいな口をきいてみたり、丁寧に話しかけてみたり距離の取り方も気軽に試す。身構えることのない素のままのその人が出所を求めているようにさえ思える。

草刈りを終え、汗を拭きながら勝手口から声をかけると、利用者の老婦人が「上がつてお茶飲んでいきなさい。」と言う。ちよつとした事務もあるので、言われるまま上がる。台所のテーブルの上には、書き物だったり、野菜の入つたサラダボウルであつたり、手仕事の途中がそのまま置いてある。それらの隙間に置かれたお茶をいただきながらポツリポツリと対話をしていると、スツと深みが口を開ける瞬間に出合う。ぼくがすることといえば、ただそれに蓋をしないようにするだけだ。

「あら、あなたにこぎゃん(こんな)ことまで話してしまつて…。」

今のこの立場、思いのほか豊かな時間に巡り合う。

空き家 11
木幡智恵美

生家③

三十年余り前に切つた杉に代わつて庭に我が物顔で突つ立っているのは櫻だ。どこから飛んでくるのか、勝手に生える木がある。トベラや車輪梅は低木だからいいけれど、こんな巨木がやつて来るとは。週一、二回畑に通う際は、草取りなどの作業に追われ、気が付かないうちに家の屋根を超えてしまうほどになつていた。杉はまつすぐ上に伸びていたが、この木は、枝を四方八方に広げ、庭の広い範囲に影を落とす。落葉樹なので冬には葉を落とし、さほど気にはならない。しかし、春になると新芽が出て、今の時季から枝にはびつしり葉が生い茂る。数年前から、枝を切つてはいるのだが、すぐに元通りになり、さらに成長を続ける。幹は太く、とてもノコギリなどで切れない。下手をすると、屋根に倒れて家をつぶしてしまう恐れがある。「この太さだからな。切る自信ないな」と夫は呟く。

もう一つ、これは植樹したので文句は言えないが、プレハブの道路側に植えたヒバ。常緑樹だから、築地松代わりにも思つたのだ。十本も植えるのではなかった。これも、枝は広がるし、背は高くなるし、厄介だ。道路に面しているので、枝が伸びてくると車を通るのに邪魔になる。だから、まずは道路側の枝を落としていく。家の側は、脚立からプレハブに上つて夫が切り、落としたのを私が始末するという分担で毎年やつていた。が、プレハブを一昨年撤去したので、脚立だけだ。上が切りにくいので、適当なところでばつさりやつてしまわねばならない。

元からある木は二本の山茶花と百日紅。山茶花は父が手入れをし、形を整えていて、寒くなると、片方には少し桃色がかつた赤、もう片方には真っ白な花が見事に咲いていた。今でも、花はちらほらと咲いてはくれるが、枝はまばらで、貧相な形のま、櫻の根元に何とか生き残っている。百日紅も元はすつくと立っていたのだらうが、今や地を這うように息づいている。それでも、夏になると地べたで白い花を咲かせてくれている。

ヒバは何とか処理できるけれど、櫻は近々業者に頼むなりして、伐採しなければと思つているところだ。

30代フリーター 先週、ジイさんが言っていた柄谷行人と吉本隆明の対立というのはどんな対立だったんだ。

年金生活者 吉本の発行していた雑誌『試行』の「情況への発言」（1989年2月）から吉本の柄谷批判を拾ってみる。

「蓮見重彦、柄谷行人に浅田彰を加えれば、まさに知的スノッブの三バカ」

「蓮見や柄谷や浅田のようなソフト・スターリニズムのシンパへ転落することが『闘争』などと勘違いがいた次元で物をいっている連中」

「読まないで批評するという点でも、けちな権力意識でも浅田などを選ぶところのない最低のブント崩れ」

30代 今のSNSで飛び交う非難の応酬の先駆けをなすような激しさだ。

年金 この柄谷批判は、柄谷が蓮見重彦との対談『闘争のエチカ』（1988年）で吉本を批判したのに応答したものだ。柄谷はそこでこんなことを言っている。

て可能になった。交換様式論ではそこに視線が届かない。消費が過剰化する前の段階の資本主義、すなわち第2次産業中心の産業資本主義と、現在の第3次産業中心のポスト産業資本主義との間には目に見える違いがあるのに、柄谷は問題にしない。

それは生産様式を考察の外に置いたことの代償と言っている。代償はそれだけではない。何が交換を起動し、その様式を決めるのかを明らかにすることができなくなった。言い換えれば、支配的な生産様式の推移こそが、支配的な交換様式の推移を駆動すると考えるほかない。

30代 柄谷は交換様式をAⅡ互酬（贈与と返礼）、BⅡ服従と保護（略取と再分配）、CⅡ商品交換（貨幣と商品）、DⅡAの高次元での回復の4類型に分け、これまでの歴史はA、B、Cの順に支配的な交換様式が移り変わってきたとしている。Dは支配的な交換様式になったことはないが、それは必ず到来すると柄谷は予言する。

「彼の言葉は全部比喩ですよ。比喩は共同体のなかで通じるだけです。つまり、吉本を『今世紀最大の思想家』と思っっているような人たちのあいだで。彼の言葉はあまりにも不正確で、読むに耐えない」。吉本の影響を受けて文芸批評家として出発し、吉本と対談したこともある若いころの柄谷とは別人のようだ。

30代 それでも、ジイさんが柄谷を「吉本の達成の継承者」と評価したのはどういうわけだ。

年金 当時の柄谷は吉本が白と言えれば黒と言え、吉本が三角と言えれば丸と言え、黒と白を続けていたように思える。それが彼の考えを吉本の考えの陰面または陽面のように形づくったと考えれば、そういう評価が成り立つ。柄谷の交換様式論はそれが結実したものと見て読むことができる。

吉本が人間のもつ観念を共同幻想、対幻想、個人幻想の3つの次元に分けたのに対し、柄谷は「とにかく、思考主体だろうが性的関係だろうが、すべ

年金 どの交換様式が支配的な様式になるかは各時代の生産力によって決まると考えれば、交換を起動し、その様式を決める力が何のかを説明することが可能になる。Aの支配的な段階の生産力は狩猟採集であり、Bの支配的な段階の生産力は農耕であり、そしてCの支配的な段階のそれは機械工業だ。狩猟採集の段階では生産物の貯蔵が不可能であり、交換の範囲も規模も氏族

て共同幻想（制度）の中にあるのだと考えてみるべきです」と異議を唱えている。柄谷は、対幻想も個人幻想もすべて共同幻想、すなわち制度として扱うことによつて、対幻想の領域に属する家族や親族やそれに類する主体は贈与と返礼から成る互酬交換という制度の担い手として、また個人幻想の主体としての個人は商品交換という制度の担い手として、そして共同幻想は再分配という制度を担う国家として位置づけるに至ったと考えることができる。

30代 吉本が資本主義の高度化とともに出現した消費社会を論じたのに対し、柄谷の交換様式論は消費社会にほとんど触れていない。

年金 消費は生産と表裏一体をなす。柄谷は、社会の土台を生産様式ではなく、交換様式と考えるので、消費についてもおのずと語ることが少なくなっている。

吉本は現在を消費の過剰化した社会と考えた。それは産業のソフト化に支えられた生産力の飛躍的な拡大によつ

的な共同体の内部にとどまる。すなわちAにならざるを得ない。農耕は穀物の貯蔵を可能にするので、交換の規模と範囲が広がり、Bが支配的となる。その担い手はそれまでの共同体を超える共同体、すなわち国家になる。機械工業は生産物の量を飛躍的に増大させ、その交換は国家だけでは手に負えなくなる。種類も一挙に多様になり、統一的な交換の基準が必要となる。それが等価交換であり、貨幣にほかならない。

30代 では、Dが支配的となる段階の生産力は？

年金 現在の世界の先進地域よりもさらに発展した生産力、すなわち富の稀少性をゼロに近いレベルにまで至らせる生産力だ。それは自然に大きく手を加えなくても自然の恵みが得られる狩猟採集の段階と相似形をなす。柄谷の言葉を借りれば、その「高次元での回復」がDを支える。生産力を制限する斎藤幸平の「脱成長コミュニティ」はしたがって、Dたり得ない。

ニュース日記 881
中村 礼治

柄谷行人と吉本隆明